〈講　演〉

伝統は常に新たな創造の根源

老天月下方丈

老衲は韓国曹溪宗佛宝宗刹霊鷲叢林通度寺の方丈、老天月下と申します。今日は、横浜善光寺留学僧育英会の創立十周年を迎えて、国内外の貴賓の方々と同席し、記念法要を行うことになり、誠に光栄の至りと存じます。同時に、この喜ばしい式典に私共を御招待下さいました黒田武志理事長をはじめ、育英会の関係の方々に深く感謝申し上げます。

横浜善光寺の御住職であり、かつ、育英会の理事長であられる黒田老師が世界の佛教文化の発展の交流に大きく貢献されていらっしゃるのは、日本佛教界だけでなく、韓国佛教界にも広く知られております。黒田老師の偉大なお力に深い敬意を表します。一昨年は黒田老師御夫妻と佐藤俊明老師、東隆眞老師の四人の先生方が私の通度寺をお訪ねくださり金襴袈裟や大本山永平寺蔵版『正法眼蔵』九十五巻を御寄贈下さいましたことをこの席をお借りして、もう一度御礼申し上げます。

曹洞宗は日本佛教史上最も卓越した宗教者道元禅師によって開創され、「只管打坐、修證一如」を修行の根本にして精進なさっていることと存じます。道元禅師の名著『正法眼蔵』

による禅修行は佛教界に、高い禅思想を鼓吹させてきたと思います。また『正法眼蔵随聞記』や『典座教訓』の教えは修行僧の大きな道しるべになってまいりました。ところで「日日常行未證行、時時喫飯未證喫」という祖師のお言葉がございます。毎日行動するが行動していない。いつも食べるが食べていない、と言う禅句でございます。変わらない本来面目から見ると、行動しても行動する主はいないのであり、食べても食べる主はいないのです。虚妄の肉身または衆生心には、行動する主もあり、食べる主もありますが、本来面目の佛生には、生と滅、名と相などの相対的な世界がなくなっているので、行動する主や食べる主があるはずがないのでございます。ですから、衆生は

毎日働いているが働いている主がわからないのであり、食べているが食べている主がわからないのです。このような理由で正法は理解することがむつかしいのであり、実践することがむつかしいのでございます。では、どうすれば本来面目を悟り、正法を真に理解することができるのでありましょうか。たくさんの方法がございますが、話頭一念に精進すれば悟ることができると思います。話頭とは、分別妄想を断ち切り、一念に精進するものであり、修行者の生命であります。歴代祖師と千聖がみな話頭一念に出現されたのでございます。初心者は話頭を参究しようとしても一念にできないのですが、だんだん慣れれば、行住坐臥、語黙動静の日常の生活の中で、日常そのままが修行であることがわかるようになります。ですから、話頭と日常は別ではありません。服を着て、食べて、働く日常がすなわち修行道場であります。不動智、自然智、佛智慧は遠いところにあるのではありません。これは既に一切衆生に具存されていると言うことをお釈迦様はおっしゃいました。佛教の目指しているものは、誰もが成佛するところにあります。そして、成佛は、時間と空間、世間と出世間を超越しているのです。ここにお集りの大勢の佛教徒の皆様、我ら皆成佛致しましょう。

私の居ります通度寺について少しお話致したいと思います。通度寺は、今から千三百五十年前の新羅時代に、慈蔵律師によって開創された、韓国佛教の戒律の根本道場、即ち、戒律の総本山でございます。昔から今日に至るまで通度寺は南山律宗の戒律精神がよく守られてきた道場であり、全ての佛教徒はもちろん、韓国人の信仰の帰依処となっておりま

す。禅が佛様の心であるならば、律は佛様の行であります。律は佛教の実践であります。実践は全ての宗教の生命であります。千三百年の間よく守られてきたこの戒律の精神がこれからも全ての佛教徒の亀鑑と生命になるように、よく実践し、継承してまいる所存でございます。温故而知新という言葉のように、昔の伝統は常に新しい創造の根源であるので、戒律を厳しく守ることが即ち佛陀精神の根本であることを自覚し、通度寺の開創精神を守ってまいります。今日、横浜善光寺留学僧育英会創立十周年を迎えて、育英会の更なる御発展と御繁栄をお祈り申し上げながら、一句の偈頌をもって私の言葉を終らせていただきたいと思います。（註　偈頌の現代訳は東隆眞先生）

若以紙墨顕我宗、達磨一宗拂地盡。
応に紙墨を以て我が宗を顕わさんとすれば、達磨の一宗地を拂って盡きぬ。
〈現代訳〉まさに紙や墨（文字、言語を指す）でわが宗（佛法の真髄）を明らかにしようとすれば、達磨大師より伝えられてきた唯一の佛法はこの地上から消滅してしまう。

若捨煩悩入菩提、不知何處有佛地。
応に煩悩を捨てて菩提に入らば、知らず何れの処にか佛地あらん。
〈現代訳〉迷いを捨てて悟りを得ようとするならば、どこに佛の世界があろうか（佛の世界は煩悩を捨てて菩提を得るというのではなく、煩悩すなわち菩提な

のである)。

参禅只在起疑団、疑去疑来似火団。

参禅は只だ疑団を起こすに在り、疑い去り疑い来りて火団に似たり。

〈現代訳〉禅を学ぶには、まず問題意識を抱くことがもっとも肝要である。不断に問題意識を起こして修行する情熱的なありさまは火のかたまりにも似ている。

横拈拄杖参方去、気似将軍戦一場。

横いままに拄杖を拈じて参じて方に去ること、気は将軍の一場に戦うに似たり。

〈現代訳〉思う存分に拄杖(師を訪ね道を求めて行脚するときにたずさえている杖)を手に持って、諸方を歴参する勇壮な気概は、まるで歴戦の将軍が戦場で戦うのに似ている。

卒地逢人揮正令、翻天覆地也尋常。

卒地人に逢うて正令を揮う、天を翻じ地を覆して也た尋常。

〈現代訳〉こうして人に会うては修行で得た実力を発揮する。天をひっくりかえして地を覆うのもまた尋常(容易なこと、当り前のこと)である。

御静聴まことにありがとうございました。

老天月下方丈　プロフィール

法号・老天　法名・月下

一九一五年　扶余（百羅の都）生まれ
一九三三年(18)　得度　以来通度寺で坐禅を続く
一九五六年(41)　通度寺住持
一九五八年(43)　〃　金剛戒壇伝戒阿闍梨（ācārya）
一九六〇年(45)　大韓佛教曹溪宗中央宗会議長
一九七五年(60)　曹溪宗宗立東国大学理事長
一九七八年(63)　大韓佛教曹溪宗元老
一九七九年(64)　〃　総務院長
一九八〇年(65)　〃　宗正代行
一九八四年(69)　霊鷲叢林通度寺方丈
一九九二年(77)　社会福祉法人通度寺慈悲院理事長
一九九四年(79)　大韓佛教曹溪宗宗正